

2014年7月13日

ブライアン・ブルエット牧師

## ピリピ人への手紙：喜びの青写真 #4

OICへようこそ。お越しくださり、ありがとうございます。今私たちは、使徒パウロがピリピの教会に宛てて書いた手紙をともに学んでいます。パウロは自身が開拓したこの教会を深く愛していました。1章全体のテーマは、苦しみの中にある喜びについてです。パウロは獄中でこの手紙を書きました。これまでの学びでお話したとおり、パウロはピリピの信徒たちの尋ねたふたつの質問に答えるべくこの手紙をしたためました。その質問の内容は、パウロの近況と福音宣教が進められているかというものでした。先週の学びでは、福音についての返答を見ました。ローマの町中でイエスが告げ知らされており、福音宣教は順調に進められていることがわかりました。今週は、パウロの近況について見ていきます。パウロが情熱を注ぐ対象は、イエスのことでした。ピリピの教会の人々はそのことを知っていました。今日の聖書箇所は、ピリピ 1:15-18 ですが、12-14 節も読む必要があると思います。では、パウロがどのように返答するか見ていきましょう。

### ピリピ 1:12-18

1:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。1:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、1:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。1:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。1:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。1:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。1:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。

18 節の「このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう」という部分がキーワードと言えるでしょう。今日の聖書箇所の 15-18 節がこの手紙に含まれているのには理由があります。パウロは、どんな迫害があったとしてもクリスチャンである私たちに喜びを持ってほしいと願っています。この場合、迫害する人々は、同じように福音を告げ知らせるクリスチャンでした。彼らは間違った動機で伝道していました。パウロはたいへん苦しんでいたに違いありません。このような攻撃は、信徒の間からも起こりえます。今日、私たちに苦しめたり攻撃したりする人たちへの対処法を3つご紹介したいと思います。

### #1 反応しない。

#### ピリピ 1:15,16,17

1:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。1:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。1:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。

15 節と 17 節はどちらも似通った内容です。ねたみや闘争心から、パウロにさらなる苦痛を与えようという動機で伝道する人がいました。ここでパウロは、どのような苦しみを受けたかという詳細をまったく明らかにしません。なぜでしょう。パウロには、自分の言い分が正しいこ

とを証明する目的で論争するつもりがなかったからです。未熟なクリスチャンは、攻撃されたらその相手に激しく応酬するのが最善策だと考えがちです。

ローマ 12:19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」

自分自身を復讐する者の立場に置くことは、神の権威を自分のものとしていることになります。私たちを攻撃する人たちに復讐してくださるのは神です。よく考えると、パウロはイエス・キリストの模範に倣っているのです。イザヤ 53:7 は、偽証する人たちの前にイエスは何の反応もしないと語ります。

イザヤ 53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

彼は口を開かない、ほふり場に引かれて行く羊のようだとイザヤは言います。皆さんはどうでしょう。誰かに攻撃されたら、どうしますか。黙っているのがよいのです。真実が自ずと明らかになるのを待ちましょう。すぐにそうなるかもしれませんが、ずいぶん長くかかるかもしれません。けれども、自分で自分の身を守ろうとしてははいけません。もし本当に何か間違ったことをしてしまったのなら、その過ちを正しましょう。自分でもどうかわからない場合は、私ができるように皆さんもするのをお勧めします。それは、みことばに答えを求めることです。

詩篇 139:23,24

139:23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。

139:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

自分の正さなければならぬ部分を、聖霊に示していただきましょう。皆さんも私も、一度も過ちを犯したことがないと言える人はひとりもいません。

## #2 攻撃してくる人たちの動機に目を向ける。

ピリピ 1:17

1:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。

パウロは、なぜその人たちがそのように行動するのかを語っています。パウロをねたみ、投獄されているパウロをさらに苦しめようという動機です。彼らはなぜ嫉妬していたのでしょうか。この人たちも同じクリスチャンでした。「フレンドリーファイア」という言葉を聞いたことがありますか。これは、味方への攻撃を指します。この場合は故意ですが、たいていの場合は誤射や暴発などが原因です。この人たちの語っていることに注目すると、非常に偽善的であることがわかります。というのも、キリストを宣べ伝えてはいても、世の人のように考え行動しているからです。彼らが妬んでいたのは何でしょう。パウロの福音宣教が成功していたからなのか、あるいはパウロのような賜物が彼らにはなかったからなのでしょう。牧師同士の間にも嫉妬があるというのは信じがたいことかもしれませんが、牧師が集まる集会では必ずと言ってよいほど、「お宅の教会はどれくらいの人数ですか」という質問が出ます。言い換えると、「あなたの働きはどれくらい成功していますか」と聞きたいのです。教会内で攻撃を受けた時は、パウロの例に倣ってください。反撃せず、その動機を探りましょう。何か間違ったことをしていないか、自分自身のことも探りましょう。その人たちの動機が理解できなければ、やはり反撃したくなります。ですから、その状況についてゆっくり考えましょう。

## #3 信頼できる人に目を向ける。

## ピリピ 1:16

1:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています、

この個所で、「一方の人たち」というのは、パウロが信頼できる人たちです。誰かに言葉や行為で攻撃されると、世界中が敵のように感じてしまいます。私たちが攻撃するのは、周囲の一握りの人たちに過ぎないことを忘れがちです。パウロは、友人たちのことを思い起こそうとします。その友人たちとは、ピリピの教会の信徒たちです。友人たちはわかってくれているとパウロは自分自身に言い聞かせています。友人たちは、パウロが福音のために投獄されていることをよく承知していました。このような状況でパウロはどんな反応をしたでしょう。傷つくのは避けられませんが、そのような状況をも活かしましょう。レモンをもらったらレモネードを作ればよい、という言葉のとおりです。パウロは、自分自身を知っていました。彼は、神に栄誉を帰すことを願い、そのことに専念している人でした。パウロは自分自身の過ちを知っていたので、他人の過ちに目をつぶることができました。

## ローマ 7:15-17 リビング・バイブル

15 私は自分が全くわかりません。ほんとうは正しいことをしたいのに、できないのです。反対に、したくないこと、憎んでいることをしてしまいます。16 自分の行ないが誤りであること、破っているおきてそのものは良いものであること、それは、よくわかっています。17 しかし、どうにもできません。それをしているのは、もはや私ではないからです。悪を行なわせるのは、私のうちに住みついている、私より強力な罪なのです。

パウロは自分にも悪いところはあると認めた上で、その欠点を克服して神に用いられたいと願いました。私たちには罪を犯す性質があります。この性質はキリストとともに十字架に付けられました。ときとして、私たちは内に潜む罪の性質に負けてしまうことがあります。この罪の性質は、私たちのうちに潜伏しているようにも思えます。そして時折、誘惑が引き金となり、したくもない悪を行うという状態に陥るのです。

## 結び

### ピリピ 1:18

1:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいますが。そうです、今からも喜ぶことでしょう。

この短い個所をパウロはこのように締めくくります。「見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいますが。」神のしもべである使徒パウロはこのように模範を示してくれました。私たちも、迫害があっても喜びを持つことができます。私たちが苦しめようとする人がいても、喜んでいられます。私たちが悩まそうとする人は必ずいます。また、パウロは自分に過ちがあっても喜んでいました。私たちは攻撃されると、喜びが奪われてしまいがちです。そのような暗雲の垂れこめた状態で歩んでいると、キリストにある成長へとつながる一歩を踏み出せなくなります。自分を守ることに明け暮れ、主イエスを世に示すことをないがしろにしてしまうからです。